



日本植物病理学会ニュース 第59号

(2012年8月)

【名誉会員・永年会員の略歴とお話】

名誉会員 佐古宣道



昭和11年9月14日、哈爾濱市（旧満州国）生まれ、昭和35年山口大学農学部農学科卒業、九州大学大学院修士・博士課程進学後、同課程単位取得退学し、昭和41年1月九州大学農学部助手に採用された。この間、文部省在外研究員としてウィスコンシン大学に1年間滞在、昭和46年佐賀大学農学部助教授、同教授、同農学部長を経て、平成8年2月同大学長に就任し、平成14年2月に2期目の任期満了により退職した。同年4月から3年間佐賀県科学技術顧問・佐賀県農業大学校長を務めた。平成17年7月から九州共立大学学長、平成20年4月から2年間、山口大学常任監事を務めた。

学会活動では、日本植物病理学会評議員、編集委員、九州部会長、大会委員長を務め、何回かの大会と各種の談話会の九州での開催に尽力した。平成6年4月「ポティウイラスのアブラムシ非永続伝搬機構の解明とその血清学的研究」で日本植物病理学会賞を受賞した。一方、日本学術振興会から共同研究のために、インドネシア4回、マレーシアに6回、イギリス、フランスに各1回派遣され、文部省科学研究費によるインドネシア、タイの各大学と学術共同研究を実施した。JICAの短期専門家として、バングラデシュ農業大学院の設置のために2回派遣された。研究生活を共に過ごしたインドネシア、タイ、韓国、中国からの元留学生達が実施しているそれぞれの教育・研究の現状を評価している。昭和20年8月の終戦時から1年間、吉林市（旧満州国）で過ごさざるを得なかった難民生活の体験ならびにその後の国内での食糧難を想い起すたびに、農学の一研究者として現在の食糧自給率の低迷を大いに懸念している。

近年の科学技術の急激な進展に伴って高度な手法を用い

ているが、細分化された研究成果をどのように農業生産の現場に役立てていくか、俯瞰的な視点からの対応が今後の検討課題ではなかろうか。

永年に渡りご指導を頂いた諸先生と多くの会員の皆様、および研究室の卒業生に心より感謝申し上げ、会員の皆様様のなご一層のご健闘とご発展を祈念する。

永年会員 宇田川晃

昭和11年11月17日満洲国（現中国）生まれ。昭和36年東京教育大学農学部農学科（現筑波大）卒業、同37年農学専攻科修了。同4月日本専売公社秦野たばこ試験場（現JT）勤務。昭和47年3月公社を退職、同4月神奈川県農業総合研究所（現農業技術センター）勤務。平成9年3月県を定年退職。同4月特殊法人神奈川県農業会議で嘱託勤務。同12年3月期間



満了退職し現在に至る。大学は、故平塚直秀、佐藤昭二先生の研究室でさび病菌の同定や接種方法を学ぶ。たばこ試験場は故日高醇、故都丸敬一先生の研究部でウイルスの同定、診断、抗ウイルス剤探索等に携わる。そこでTMV4系統、CMV5系統、PVY4系統、AMV2系統、TRV2系統、TNV、PVX、わい化病、巻葉病等に出会う。農総研は水沢芳名先生の病虫科等で病害診断、防除試験、病害虫の発生予察調査等を担当。昭和49年神奈川県のとまとに突然激しい症状が発生し、7市11圃場のハウス、露地約80aで大きな被害が出た。各種植物への汁液接種、粗汁液中の安定性、アザミウマによる伝搬、種子伝染の有無、DN法によるウイルス粒子の観察、文献の調査、井上忠男先生の御意見も伺い、TSWVと同定した。ウイルスの精製法、抗血清は確立していなかった。タバコ、ピーマン、スイカ等でも発生が報告されとまと黄化えそウイルスと命名された。

追試験，故都丸敬一，高浪洋一先生の御協力やタバコえそ萎縮ウイルス(久保)，タバコ脈緑モザイクウイルス(久保)，たばこわい化ウイルス(桑田)，タバコ条斑ウイルス(都丸ら)も引用して，平成4年「わが国におけるタバコ・ウイルス病の発生と病原ウイルスの同定・診断に関する研究」で東京農業大学から農学博士の学位を取得。現役最後は小林正伸，植草秀敏博士，内山和子，折原紀子の各位に支えられた。最近では平成21年TRV(タバコ茎えそウイルス)が茨城県のピーマン，長野県のホウレンソウに発生している。学会では大会運営委員や部会の座長を数回務めたのですが，この度永年会員に推挙いただき名誉なことと感謝いたしております。学会が今後とも基礎と実学の両面で発展することを願っております。

永年会員 齋藤 泉



1936年4月東京生まれ。北方に惹かれて1956年の春札幌に來り，1960年3月北大農学部農業生物学科・植物学分科を卒業し，武田薬品札幌支店で農薬の販売・拡張と出身講座(植物寄生病学)の助手を夫々3年勤め，'66年6月北海道立中央農試病虫部の研究員になる。幾度かの異動を経て最後に道南農試場長を4年勤め1994年3月退職した。この間，地方農試研究者のnicheを解ってはいたものの，上司の馬場徹代氏の指示で始めた*Sclerotinia*の研究は面白くて堪らず一線を越えた。学位論文に纏めた*S. sclerotiorum*菌核の成熟と発芽の研究は国外では評価された。最初IMC2(1977, Tampa)のシンポに招かれたが出張もならず，日植防から派遣する調査員と言う資格で渡米出来た。これには当時の北海三共社長，高岡恭博士のお力添えのあった事を後日知り，今なお感謝している。日本人で只一人，私の講演を聞いて下さった大谷吉雄先生(科博)や富山宏平博士から率直な評価を貰い嬉しかったと記憶している。その後も*Sclerotinia* workshopへの参加や幾度かの国際研究交流があったが省く。退職後は北海三共(現ホクサン)の研究所でイチゴ土壌病害や芝雪腐病の生物防除などの仕事の傍ら*Sclerotinia*の研究を再開した。研究から離れて久しかったが，リハビリを応援してくれるひと居て復帰は早く，未記載の菌核病菌の分類・同定その他の研究を完成した。この内*S. nivalis* I. Saitoを北日本の地域種と考えていたが，PMAC '97(札幌)で逢ったロシア人研究者との共同調査

で極北ロシアからウラルを越えて西シベリアに広く分布する事が判った。こうして北海三共には12年間も世話になり'06年退職した。次いで北大理学部の研究生になりその身分で産総研に3年間通った。目的は極東における*S. borealis*(雪腐大粒菌核病菌)の種内分化の分子系統解析だったが結論に至らず，さらに北海道医療大・国永史朗教授の許で3年間PCRと培養実験・形態観察を続け，関係ある3領域の塩基配列を読み終えた。これからPAUPを駆使して系統樹を書き，論文に纏めるつもりだが，投稿するまで，さらにハードルが幾つもある。この様に過すうち，いつの間にか76歳を過ぎてしまった。

永年会員 但見明俊

1936年12月8日，島根県生まれ。1955年京都大学農学



部入学(農林生物学科分属)。同大学博士課程中途に助手から1963年農林省入省。千葉市にあった畜産試験場飼料作物部で牧草・飼料作物の病害を担当。1970年の草地試験場設立に伴い，1972年栃木県西那須野町に移る。1975年草地試験場環境部主任研究官。1979年京都大学より農学博士号取得。1981

年北海道農業試験場草地開発第二部牧草第3研究室長。1984年日本草地学会賞(斎藤賞)受賞。1985年パラグアイ国出張。1988年飼料資源部耐病性研究室長。1991年草地試験場環境部長。1997年農水省を定年退官。滋賀県立大学環境科学部教授。2006年滋賀県立大学を定年退職。同大学名誉教授。

農林省入省当時は，それまで稲作中心であった日本農業の畜産部門を拡大しようという時代であった。導入試験中の牧草・飼料作物に病害が多発し，西原夏樹室長は病原の分類・同定に活躍された。やがて，対策研究が少ないという批判が聞こえ，私は耐病性の研究を受け持つようになった。これが学位論文「イネ科牧草黒さび病の抵抗性遺伝と寄生性分化」に繋がり，日本草地学会賞受賞に繋がった。北海道では佐藤徹前室長の後を受けて，新発生病害，雪腐病，アルファルファパーティシリウム萎凋病及びチモシーがまの穂病を取り上げた。佐藤倫造，島貫忠幸，松本直幸の研究室員がいずれも働き盛りで，楽しく実りのある研究生活であった。一方学会活動では，赤井純部会長のもと，上田一郎，小林喜六，児玉不二雄幹事と北海道部会を運営。この頃評議員2期。また，パラグアイ出張を機にJICAと

の繋がりが出来て中南米からの研修員を受け入れた。これには家内の協力も得た。チモシーがまの穂病の研究は、エンドファイトとしての特性を取上げ、後年、滋賀県立大学で継続した。草地試験場環境部長の頃、(社)日本飼料作物種子協会の国内外のエンドファイト採集や利用研究の現場に立ち会った。滋賀県ではエンドファイト研究が禾穀類に及ぶことを想定して自生のアオカモジグサのエンドファイトも取り上げた。同時に岩手大学雑賀優教授のグラスエンドファイト研究チームにも加わった。現在は島根県在住。

永年会員 渡邊恒雄



1937年2月20日栃木県生まれ。1961年3月東京大学農学部卒業、1962年同学大学院を中途退学。米国カリフォルニア大学大学院バークレイ校植物病理学科へ留学、1964年1月にM.S., 1967年9月にPh.D.を取得、“インゲン炭腐病菌 *Macrophomina phaseoli* の土壤中での生態”を研究、W.C. Snyder, R.S. Smith と M.S. Fuller の3教授が論文を審査。1967年10～12月東京大学農学部文部教官を経て、12月農林省農業技術研究所へ出向、1983年3月林業試験場(現(独)森林総合研究所)へ転任、1997年3月同研究所を定年退職。同年8月からバイオインダストリー協会主任研究員((株)メルシャン所属)として(独)産業技術総合研究所(産総研)のプロジェクトに参加、2002年同プロジェクト終了後産総研の客員研究員となり、現在に至る。これまで植物の土壤病害と病原菌の分類、生態と防除、リグノセルロース分解菌を研究し、日本植物病理学会報の31編、日本菌学会報の50編の原著論文を含む170編の論文を報告した。とくに *Armillaria* 菌などの *Sordaria* 菌の子嚢殻と子嚢胞子形成への影響についての論文 (*Mycol. Res.* 101: 1190–1194 (1997)) と2つの菌による木材劣化評価に関する論文 (*J. Biosci. Bioeng.* 95: 623–626 (2003)) は *Mycol. Res.* 誌上や *Bio. Med. Lib.* など好評を博した。また収集、同定した750菌株を国内外のジーンバンク (MAFF, ATCC など) に登録し保管した (日本菌学会ニューズレター2010年1月)。著作: 写真と図解 土壤糸状菌 (ソフトサイエンス社1986), 植物土壤病害の事典 (朝倉書店1998), *Pictorial Atlas of Soil and Seed Fungi* (初版 (1994), 2版 (2002), 3版 (2010)) (米国 CRC Press) と数点の共著書がある。受賞: 1996年農林水産功績者表彰, 1997年日本植物病理学

会賞を受賞。学会活動: 1960年代から日本の植物病理学会と菌学会に入会。米国の植物病理学会と菌学会の名誉会員 (2002年以來), 日本植物病理学会報原著編集委員, 日本有用植物病名目録委員, 日本菌学会報編集委員, 第3回国際菌学会議 (1983年) プログラム委員, また東京農工大学 (1986年), 第1回教育プログラム (2004年), 植物防疫官研修 (1980～1990), JICA 研修員の非常勤講師を務めた。出張活動: グアテマラ (カリフォルニア大学, 1967年), 沖縄 (総理府技官, 1969年11月～1970年1月, パイナップルの土壤病害の研究), 台湾 (熱帯農研併任, 1972年4月～11月, サトウキビの土壤病害の研究, 1984年11月, 中華植物保護学会・Food & Fertilizer Tech. Center/ASPAC 共催 土壤病害防除に関するセミナー), 北米 (総理府中期在外研究員, 1979年), パラグアイ (国際協力事業団 (JICA), 1985年, キリの土壤病害研究), ドイツ, スイス (科学技術庁, 1990年, 第4回国際菌学会議 (IMC4)), カナダ (IMC5, 1994年), ドミニカ共和国 (JICA, 1996年, 胡椒の土壤病害研究), フランス, スペイン, メキシコ (バイオインダストリー協会, 1997年と2002年) とその他数カ国に JICA の短期専門家として出張。

最後に、この度の永年会員への推挙とそれに伴う恩典に浴し大変光栄に思います。これを機に仕事を振り返り、整理、公表し、さらに前に進みたいと思います。父 (渡邊龍雄, 1978年度名誉会員) 共々学会各位には長らくご指導、ご支援を頂き、深く感謝いたします。

【会員の動静】

1. 人事

(1) 大学関係

藤田 隆	H24.3	[退職] 弘前大学 農学生命科学部 生物資源学科 助教
荒瀬 榮	H24.4	島根大学 生物資源科学部 学部長
五味剣二	H23.4	香川大学 農学部 応用生物科学科 准教授
田中千尋	H24.4	京都大学 農学研究科 微生物環境制御学 教授
中馬いづみ	H24.1	[採用] 神戸大学 自然科学系先端融合研究環 植物病理学研究室 助教
池田健一	H24.1	神戸大学 農学研究科 細胞機能構造学研究室 准教授
朴 杓允	H24.3	[退職] 神戸大学 農学研究科 細胞機能構造学研究室

		教授			研究領域 上席研究員（プロジェクトリーダー）（同研究領域 主任研究員）
(2) 農水省関連独法関係					
岩波 徹	H24.1	農研機構・果樹研 企画管理部 研究調整役（同品種育成・病害虫研究領域 上席研究員）	早野由里子	H24.4	農研機構・中央農研 病害虫研究領域 上席研究員
宮田伸一	H24.1	農研機構・果樹研 品種育成・病害虫研究領域 上席研究員（プロジェクトサブリーダー）（同主任研究員）	芦澤武人	H24.4	農研機構・中央農研 病害虫研究領域 主任研究員（同水田利用研究領域 主任研究員）
中島 隆	H24.2	農研機構 総合企画調整部 研究管理役（内閣府 食品安全委員会事務局次長）	門田育生	H24.4	農研機構・東北農研 生産環境研究領域 上席研究員（同環境保全型農業研究領域 上席研究員）
長谷川裕	H24.4	農林水産省 北陸農政局 次長（農研機構 理事）	菅原幸哉	H24.4	農研機構・東北農研 生産環境研究領域 主任研究員（同畜草研 飼料作物研究領域 主任研究員）
竹中重仁	H24.4	農林水産省 農林水産技術会議事務局 研究調整官（農研機構 総合企画調整部 研究管理役）	今崎伊織	H24.4	農研機構・東北農研 生産環境研究領域 主任研究員（同環境保全型農業研究領域 主任研究員）
吉田めぐみ	H24.4	農林水産省 農林水産技術会議事務局 研究推進課課長補佐（農研機構・九沖農研 生産環境研究領域主任研究員）	富岡啓介	H24.4	農研機構・近中四農研 水田作研究領域 主任研究員（農業生物資源研 遺伝資源センター 分類評価研究ユニット 主任研究員）
中島敏彦	H24.3	[退職] 農研機構・東北農研 水田作研究領域 上席研究員	窪野高德	H24.4	森林総研 企画部研究評価科長（同森林微生物研究領域長）
川部眞登	H24.4	[採用] 農研機構・中央農研 病害虫研究領域 研究員	佐橋憲生	H24.4	森林総研 森林微生物研究領域長（同領域森林病理研究室長）
増永 章	H24.4	[採用] 農研機構・畜草研 飼料作物研究領域 研究員（農研機構・北農研 畑作研究領域 任期付研究員）	松田輝子	H24.4	種苗管理センター 業務調整部・種苗検査課 主任調査員／同品種保護対策課 副品種保護対策役 [併任]（同西日本農場 業務第1部主任調査員 兼副品種保護対策役）
石原岳明	H24.4	[採用] 農研機構・中央農研 病害虫研究領域 任期付研究員	不破秀明	H24.4	種苗管理センター 北海道中央農場 後志分場 主任調査員（同北海道中央農場 業務部主任調査員）
荒井治喜	H24.4	農研機構・中央農研 企画管理部研究調整役（北陸担当）（同水田利用研究領域 上席研究員）	谷口麦子	H24.4	種苗管理センター 業務調整部 病害検査室調査員（同北海道中央農場後志分場 調査員）
大藤泰雄	H24.4	農研機構・中央農研 病害虫研究領域 上席研究員（プロジェクトリーダー）（同研究領域 主任研究員）			
鈴木文彦	H24.4	農研機構・中央農研 病害虫			

(3) 都道府県試験研究機関関係

竹内 徹	H24.4	北海道立総合研究機構中央農試作物開発部 部長	阿部篤智	H24.4	山形県農林水産部病虫害防除所業務課 専門防除員
堀田治邦	H24.4	北海道立総合研究機構道南農試研究部地域技術グループ 研究主幹	菊地繁美	H24.4	山形県村山総合支庁農業技術普及課 課長補佐
美濃健一	H24.4	北海道立総合研究機構中央農試病虫部グリーン病虫害グループ 主査	梶 和彦	H24.4	福島県農業総合センター安全農業推進部分析課
新村昭憲	H24.4	北海道立総合研究機構上川農試研究部地域技術グループ 主査	鈴木洋平	H24.4	福島県県北農林事務所伊達普及所
藤根 統	H24.4	北海道立総合研究機構上川農試研究部生産環境グループ 研究主任	佐野真知子	H24.4	福島県農業総合センター果樹研究所病虫害科（新採用）
東岱孝司	H24.4	北海道立総合研究機構中央農試病虫部グリーン病虫害グループ 研究主任	森川千春	H24.4	石川県農林総合研究センター農業試験場総合研究部病虫害防除室 専門員
雪田金助	H24.4	(地独) 青森県産業技術センター農産物加工研究所 所長	安達直人	H24.4	石川県農林総合研究センター農業試験場資源加工研究部生物資源グループ 専門研究員
倉内賢一	H24.4	(地独) 青森県産業技術センター農林総合研究所病虫部 研究管理員	渡邊 健	H24.4	茨城県病虫害防除所 次長
近藤 亨	H24.4	(地独) 青森県産業技術センター農林総合研究所病虫部 研究管理員	河又 仁	H24.4	茨城県農業総合センター生物工学研究所 研究調整監
山本晋玄	H24.4	青森県病虫害防除所 主査	三木静恵	H24.4	群馬県農業事務所普及指導課藤岡地区農業指導センター
山端直樹	H24.4	青森県病虫害防除所 技師	梅本清作	H20.3	[退職] (H20.4 再任用 千葉県立農業大学校農学科 副主幹)
勝部和則	H24.4	岩手県農林水産部流通課 主任主査	植松清次	H24.3	[退職] (H24.4 再任用 千葉県農林総合研究センター暖地園芸研究所野菜・花き研究室 主任上席研究員)
辻 英明	H24.4	宮城県農業・園芸総合研究所園芸環境部病害チーム 上席主任研究員	鈴木 健	H24.4	千葉県農林総合研究センター企画経営部企画情報室 主席研究員
高橋智恵子	H24.4	宮城県農林水産部農産園芸環境課環境保全班 主任主査	小塚玲子	H24.4	千葉県農林総合研究センター北総園芸研究所東総野菜研究室 研究員
大場淳司	H23.7	宮城県農林水産部農業振興課経営構造対策班 主任主査	北 宜裕	H24.4	神奈川県環境農政局農政部農業振興課 課長
笹原教子	H24.4	宮城県病虫害防除所企画指導班 技師	三好 理	H24.4	神奈川県農業技術センター経営情報研究部 技師
深谷雅子	H24.3	退職（秋田県農林水産技術センター果樹試験場 場長）	舟久保太一	H24.4	山梨県総合農業技術センター環境部 部長
佐藤智弘	H24.4	山形県省内総合支庁産業經濟部酒田農業技術普及課 防除企画研究員	武田和男	H24.5	退職（長野県農業試験場 環境部長）
			中村真人	H24.3	退職（長野県病虫害防除所企画幹次長）

田村美佳	H24.4	富山県農林水産総合技術センター病理昆虫課 主任研究員	東 貴彦	H24.4	果樹研究部門カンキツ研究室 熊本県球磨地域振興局農業普及・振興課 主任技師
天野昭子	H24.4	岐阜県病害虫防除所技術課長補佐兼企画防除 第二係長	玉野井昭	H24.4	大分県農林水産研究指導センター農業研究部温州ミカンチーム 研究員(新採用)
堀之内勇人	H24.4	岐阜県西濃農林事務所農業普及課 技術主査	櫛間義幸	H24.4	宮崎県総合農業試験場生物環境部 副部長(入会)
浅野雄二	H24.4	岐阜県飛騨農林事務所農業普及課 技術主査	今村幸久	H24.4	宮崎県総合農業試験場生物環境部 部長(退会)
辻 朋子	H24.4	三重県農業研究所 研究員	河野伸二	H24.4	沖縄県農林水産部営農支援課 副参事(農業革新支援専門員)
小坂能尚	H24.4	京都府農林水産技術センター企画室 主査	金城衣恵	H24.4	沖縄県農林水産部南部農業改良普及センター 主幹
安井洋子	H24.4	和歌山県農業試験場環境部副主査研究員			
渡辺博幸	H24.3	退職(鳥取県西部総合事務所農林局)			
新田浩通	H24.4	広島県立総合技術研究所農業技術センター センター長	2. 学位取得者(課程博士・論文博士)		
高橋(佐々木)直子	H24.4	広島県職員採用(前若手県農林水産部一関農業改良普及センター普及指導員)	三澤知央	H24.3	北海道大学大学院 農学研究 院 博士(農学) ネギ葉枯 病の発生生態と防除に関する 研究(北海道立総合研究機 構道南農業試験場研究部生産 環境グループ)
佐古 勇	H24.4	鳥取県農林総合研究所企画総務部 評価・企画担当参事	石濱申明	H23.4	名古屋大学 生命農学研究科 博士(農学) MAP キナーゼ によりリン酸化される WRKY 型転写因子の植物免疫におけ る役割
長谷川優	H24.4	鳥取県農林総合研究所企画総務部技術普及室 農業専門技術員	菅井維之	H24.3	愛媛大学 連合農学研究科 博士(農学) オオムギうど んこ病菌の感染戦略とオオム ギの防御戦略に関する研究
稲本勝太	H24.4	鳥取県農林総合研究所農業試験場環境研究室 研究員	Nguyen Linh Chi	H24.3	岡山大学 環境生命科学研 究科 博士(学術) Mechanism and function of glycosylation of surface filamentous proteins flagellin and pilin in <i>Pseudomonas syringae</i> pv. <i>tabaci</i> 6605
松村和洋	H24.4	鳥取県農林総合研究所園芸試験場環境研究室 研究員	Kheder Ahmed Abd El-Aziz Zakaria El-Sai	H24.3	鳥取大学 連合農学研究科 博士(学術) Molecular mech- anisms of pathogenicity of the tomato pathotype of <i>Alternaria alternata</i>
重田 進	H24.3	山口農林事務所企画振興室室長			
広田恵介	H24.4	徳島県立農林水産総合技術支援センター高度専門技術支援担当 主任班長			
田村 収	H24.4	徳島県東部農林水産局吉野川農業支援センター農業支援担当 主任			
三好孝典	H24.4	愛媛県農林水産研究所果樹研究センター病理昆虫室 室長			
石井貴明	H24.4	福岡県農業総合試験場病害虫部			
浦 広幸	H24.4	福岡県農業総合試験場農産部			
井手洋一	H24.4	佐賀県農業技術防除センター防除部 主査			
内川敬介	H24.4	長崎県農林技術開発センター	李 明珠	H24.3	岐阜大学大学院 連合農学研究

科 博士(農学) Quantitative and qualitative detection of *Pythium* and *Phytophthora* species based on PCR techniques

森 太郎 H24.3 熊本県立大学 環境共生学 研究科 博士(環境共生学) ナス属植物内における青枯病菌 *Ralstonia solanacearum* の動態と表現型変異に関する研究

3. 海外長期出張者

久保田健嗣 農研機構・中央農研 病害虫研究領域 研究員 (H23.6～H24.8) 米国 カルフォルニア大学リバーサイド校 (農研機構海外長期留学)

飯田祐一郎 農研機構・野茶研 野菜病害虫・品質研究領域 研究員 (H24.2～H26.1) オランダ, ワーゲンゲン大学 (JSPS 海外特別研究員)

【受章のお知らせ】

稲葉忠興氏が平成23年秋の叙勲において瑞宝中綬章を受章されました。瑞宝章は、公務等に長年従事し功労を積み重ね、国または公共に対して功績のあった者に国が授与する章です。稲葉忠興氏は、「べと病菌の生理・生態に関する研究」で平成7年に日本植物病理学会賞を受賞されるとともに、当学会の評議員や技術士対応委員長、また農林水産省の北海道農業試験場長、独立行政法人農研機構の中央農業研究センター長などを務められ、当学会や農林水産業の振興・試験研究に多大な貢献をされました。

(高橋賢司)

【今後の学会活動予定】

1. 平成24年度部会開催予定

- (1) 北海道部会
日時：平成24年10月18～19日
場所：北海道大学農学部（札幌市）
- (2) 東北部会
日時：平成24年9月13～14日
場所：山形大学農学部（鶴岡市）
- (3) 関東部会
日時：平成24年9月13～14日
場所：法政大学市ヶ谷キャンパス（千代田区）
- (4) 関西部会

日時：平成24年9月27～28日
場所：とりぎん文化会館（鳥取市）

- (5) 九州部会
日時：平成24年11月14～15日
場所：農村整備センター（福岡市博多区）

2. 平成24年度談話会・研究会および教育プログラム開催予定

- (1) EBC (Evidence-based Control) 研究会ワークショップ2012
日時：2012年9月11日（火）12:30～17:30, 受付は12:00より。
場所：JA全農 営農・技術センター（平塚市）
詳細：本号巻頭綴じ込みまたは学会ホームページをご覧ください
- (2) 第8回植物病害の診断・防除教育プログラム
日時：平成24年9月3～7日
場所：愛媛大学農学部（松山市）
詳細：学会ホームページをご覧ください
- (3) 第47回植物感染生理談話会
日時：平成24年8月30日～9月1日
場所：休暇村近江八幡（近江八幡市）
詳細：学会報78巻1号巻頭綴じ込み「平成24年度植物感染生理談話会のご案内」または学会ホームページをご覧ください
- (4) 第26回土壌伝染病談話会
日時：平成24年9月20日
場所：東葛テクノプラザ（柏市）
詳細：学会ホームページをご覧ください
- (5) 第6回植物病害診断研究会
日時：平成24年11月13～14日
場所：農村整備センター（福岡市博多区）

【関連学会情報】

第27回報農会シンポジウム

『植物保護ハイビジョンー2012』のご案内
最近の植物保護剤の特性と使い方

趣 旨：地球規模での環境変動及び人口増加に伴い、安全な食糧の安定供給が喫緊の課題になっている。植物保護剤は農産物の生産に重要な役割を果たしており、人への健康や環境に対する影響の更なる低減を図るため、最新の科学技術を駆使して研究開発が進められている。本シンポジウムでは、最近開発された植物保護剤の作用特

性や効果的な使い方等を討議し、今後の植物保護剤の方向を展望する。

主催：公益財団法人 報農会

協賛：日本応用動物昆虫学会，日本植物病理学会，日本農薬学会，日本雑草学会

日時：平成24年9月25日（火） 10:15～17:00

場所：「北とびあ」つつじホール（東京都北区王子1-11-1）

TEL 03-5390-1100（会場への連絡は出来ません）

JR京浜東北線・地下鉄南北線：王子駅下車，徒歩2分（下図参照）

開会：10:15～10:30 挨拶 理事長 上路雅子

講演：10:30～11:10 植物病害防除における抵抗性誘導剤の現状と展望
横浜国立大学大学院環境情報研究院 平塚和之

11:10～11:50 マクロライド系殺虫剤の特性とその使い方について
近畿大学・名古屋大学・
（株）エムシー緑化 田中啓司

13:00～13:40 最近の水田問題雑草と除草剤の開発および雑草防除
（公財）日本植物調節剤研究協会 横山昌雄

13:40～14:20 新規鮮度保持剤1-MCPの作用機構と使用について
（独）農業・食品産業技術総合研究機構果樹研究所 立木美保

14:35～15:15 新しい製剤・施用法の開発動向 一省力的な製剤および施用法について一
日本農薬学会農薬製剤・施用法研究会 辻 孝三

15:15～15:55 海外向けコメの輸出についての取り組みと最近の動向
新潟県新潟市農事組合法人木津みずほ生産組合 坪谷利之

16:00～16:45 総合討論

参加費：一般 2,000円 学生 1,000円

申込み：参加をご希望の方は下記連絡先までEメールまたはFAXで所属・連絡先と氏名をお知らせ下さい。当日、参加費と引き替えにテキストをお渡し致します。

連絡先：公益財団法人 報農会

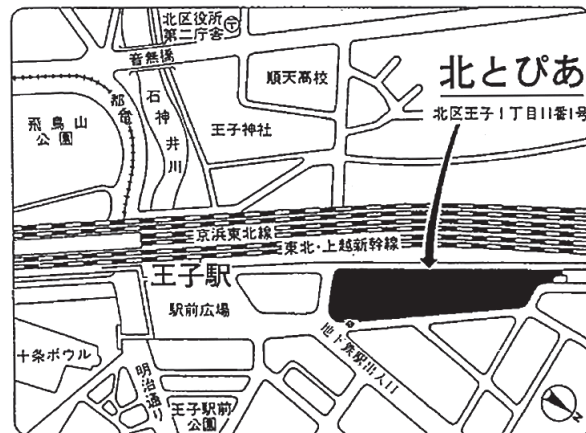
事務局 正垣 優，渡辺敦子

〒187-0011 東京都小平市鈴木町2-846-105

サンウッド花小金井101号室

TEL/FAX 042-381-5455

E-mail: khono511@car.ocn.ne.jp



【新刊紹介】

成澤才彦著「作物を守る共生微生物 エンドファイトの働きと使い方」

A5版 117 ページ；2011年12月発行 農山漁村文化協会
定価（本体1,600円＋税）

ISBN978-4-540-11143-3

エンドファイトに特段の興味があるわけではない。しかし、知っておかなければならない相手だと感じていた。今やそんな私の座右の書となっているのが本書である。

エンドファイト（内生菌）は植物体の組織や細胞内で生活する微生物の総称であり、したがってエンドファイトには種々の菌群が含まれるが、本書ではその中の根部エンドファイト（Dark-septate endophytic fungi : DSE）と称される菌群に焦点をあてている。しかし、その内容は濃く、膨大な量の情報が盛り込まれたものとなっている。

内容は大きく2つのパートに分けられており、Part 1では、「エンドファイトを知ろう」と題し、エンドファイト一般の解説に始まり、DSEの働きや役割、さらには今後の研究方向について詳述されている。Part 2では、「エンドファイトを使ってみよう」と題し、DSEを探すところから始まり、観察や選抜の仕方、そして具体的な利用方法を紹介している。その内容は下記に示した目次概要から容易に推測できよう。

Part 1「エンドファイトを知ろう」

1. エンドファイトとは
2. どんな植物とも共生できるエンドファイト

3. エンドファイトが植物に侵入・定着しやすい条件
4. エンドファイトはどんなことに利用できるのか
5. これからのエンドファイト研究の方向性は？

Part 2 「エンドファイトを使ってみよう」

1. エンドファイトを探し分離しよう
2. エンドファイトの生活史と植物内での行動を観察しよう
3. エンドファイトと植物の相互作用を高める条件を知ろう
4. 有用なエンドファイトの選抜をしよう
5. エンドファイトを上手に使おう

内容以外の特徴として、まず文章は平易でとても読みやすい。同時に、図や写真を多用しつつ、具体例を示しながら記述されているため、脳裏に鮮明なイメージを浮かび上がらせてくれる。また、ところどころで紹介されている学生との微笑ましいやりとりは、頭の休息にはもってこいである。おかげで、飽きることなく一気に読破できた。

さて、冒頭で述べたように本書は私の座右の書となっている。その一番の理由は、本書がエンドファイトやDSEに関する深い知識を与えてくれるだけでなく、分かりやすく扱い方を説明してくれることによって実践が促されるからである。日頃、いわゆる土壌病原菌を研究対象として、その宿主植物との関係性を調べていると、不思議に思う挙動を示す場合がある。本書が示してくれた解析手法を実践することによって、その答えの一端が明らかになることを大いに期待しているところである。

気になった点として、対象とする読者層が若干不明瞭であることが挙げられ、これは、タイトルから抱くイメージと実際の内容との間にギャップを覚えることにも通じる。本書 Part 2 では、栽培圃場における使用方法も記述されているものの、ごくわずかなスペースしか充てておらず、具体的データが示されているわけでもない。実際に作物を育てる際にエンドファイトを利用したいという希望や期待をもって本書を手にした読者は、拍子抜けしてしまうのではないだろうか。著者の意図には反するかもしれないが、学生を含めて試験研究に携わっている方を対象とし、Part 2 は、「エンドファイトを調べてみよう」と題した内容として読み進めると違和感を抱くこともなくなるだろう。

最後に、本書は、これまでエンドファイトに興味を持っておられた方々には、より深い知識と実践する力を、興味を持っておられなかった方々には、新しい知識と理解する意欲を与えてくれる。まずは手にとっていただきたい。分からないことやもっと知りたいことがあれば、著者に直接聞いてみるのも良いだろう。菌糸ネットワークと同様に人

間ネットワークも重要と考える著者のことである、きっと力を貸してくれるに違いない。(文責：中村 仁)

【学会ニュース編集委員コーナー】

本会ニュースは身近な関連情報を気軽に交換することを趣旨として発行されております。会員の各種出版物のご紹介、書評、会員の動静、学会運営に対するご意見、会員の関連学会における受賞、プロジェクトの紹介などの情報をお寄せいただきたくお願いします。

投稿宛先：〒114-00185 東京都北区中里 2-28-10

日本植物防疫協会ビル内

学会ニュース編集委員会

FAX: 03-5980-0282

または下記学会ニュース編集委員へ：

高橋賢司、濱本 宏、根岸寛光、植草秀敏、宮田伸一
各委員宛

編集後記

学会ニュース第 59 号をお届けします。

本号は、今年度選ばれた名誉会員・永年会員のご紹介と会員の人事異動が中心です。

新名誉会員・永年会員に選ばれた皆様の長年にわたる学会へのご貢献に深く感謝申し上げますとともに、植物病理学、農業振興などにおける国内外での精力的なご活躍に対して敬意を表したいと思います。

会員の動静について掲載しました。今春も多くの方々の異動がありました。退職された会員の皆様、長い間大変お疲れさまでした。また、異動された皆様、新しいポストでのさらなるご活躍を祈念しております。学位を取得された皆様、おめでとうございます。今後の大いなるご活躍を期待しております。海外長期留学の皆様、これを機に、益々のご発展を祈念しております。

学会活動の年内までの予定を掲載しました。部会や談話会・研究会など盛りだくさんの集いが開催されます。奮ってご参加いただきますようご案内申し上げます。

喜ばしいお知らせです。稲葉忠興氏が瑞宝中綬章を受賞されました。誠にありがとうございます。

さて、学会ニュースの編集は、本号から根岸寛光、濱本 宏、植草秀敏、宮田伸一、高橋賢司(委員長)というメンバーで行うことになりました。よろしくお願いたします。長く編集委員長を務めてこられました加来久敏さん、旧編集委員の畔上耕兒さん、本当にご苦労さまでした。

(高橋賢司)